

木曾川と長良川を結ぶ 船頭平閘門

せん どう ひら こうもん

桑名市長島町の北隣、愛知県西市立田町福原にある「船頭平閘門」は明治35年（1902）3月に建設された。以来110年、水面の高さが違う木曾川と長良川の間を船が行き来できるよう、その役目を担って稼働し続けている。

木曾三川下流域を水害から守るために

かつての木曾三川（木曾川、長良川、揖斐川の川筋は、現在とは違うものだった。濃尾平野を入り乱れるように三川が流れ、さまざまな地点で繋がったり、あるいは分かれたりしていた。この流れはどの川なのか、判明できないところさえあったという。名前が付いていた輪中だけでも47あり、まさに網状に川が運んでいた。



明治の水門扉が公園内に展示されている。現在の水門扉は半分以上に水中にあるために気づかないが、その大きさに圧倒される

川沿いのまちは三川で結ばれ、船によって物資が運ばれていた。中でも三川の河口が集まる桑名は物資の集積地であり、水運・海運の要衝として大いに栄えた。愛知・岐阜・三重の米、信濃・飛騨・美濃の木村などは、桑名の市場を経て全国に出荷されていた。

繁栄をもたらす一方で、ときには川は大きな脅威となった。洪水は被害は絶えることなく、下流域に暮らす人々を苦しめた。濃尾平野は東高西低のゆるやかな勾配にな

っており、三川が繋がっていることで、木曾川や長良川の水が揖斐川に

流れ込み、揖斐川河岸の被害は特に甚だろた。余談だが、現在も濃尾平野は全体が南西に傾く運動（傾動運動）が続いているようだ。

洪水による被害を食い止めるべく、江戸時代にも宝暦治水をはじめ

木曾三川の分流が図られたが、当時の技術では完全分流は叶わなかった。明治時代に入り、政府はオランダから技師団を招き改修を進める。三川の分流工事は明治

20年（1887）に着工し、26年後の明治45年（1912）に工事を完了

した。この工事は「明治改修」と呼ばれ、三川の流れはほぼ現在の姿となり、下流域の洪水被害は大幅に減少した。

閘門を設立し 船運衰退を避ける

木曾三川の分流工事で水害は減少し、耕地も増加するが隣の

川へ行くためには河口まで迂回することになり、その不便さから船運の衰退が懸念された。当時は橋もほとんどなく、物資の

輸送は船によることが大きかった。そこで船運確保のためにも

木曾川と長良川を繋ぐ水路閘門を建設することに

なると。閘門とは水位の異なる川の間に、水位を調節して船を通すた

めの施設。船通しとも呼ばれる。分流によって木曾川と長良川の水位差が約1メートル生じるとから、閘門が必要とされた。当時は木曾川の水位のほうが高かったが、現在は長良川河口堰の影響で長良川のほうが高い。最大で2.2メートルの水位差があるという。

閘門の工事着工は明治32年（1899）で、明治35年（1902）3

月に完成した。2年7カ月の工事期間には、延べ40万人が携わった。工事費は現在の価値に換算すると約5億円。船頭平村（当時に設けられたことから「船頭平閘門」と名付けられた。

完成後、閘門を通航する船は年間2万隻（ピーク時には3万隻）を超えていた。そのうちの約半数は木材を運ぶ筏。しかし、昭和に

職人技もさることながら、小さな力でも大きな仕事、手動で約10トンの閘門扉を動かすを可能にした先人たちの知恵に感動を覚えます」と、船頭平閘門の魅力を語る同管理所の平澤精三さん。この素晴らしい歴史遺産を100年後までもそのままの姿で残していけるようにしたいですね」と話す。



明治政府に招かれたオランダ技師団のひとり、ヨハニス・デレイケ（以前は英語読みでヨハニス・デレーケと記していたが、最近ではオランダ語読みを採用）。木曾三川分流工事の功績を称え、船頭平公園内に像が建てられている

り替えや、閘門の開閉を手動から電動に切り替えるなどの改築工事が行われたものの、日本最初の複開式閘門（内開きと外開きの二重の門扉を持つ閘門）であり、現在も使用されている貴重な閘門として平成12年（2000）5月25日、国の重要文化財に指定された。

日本らしい景観と構造を持つ閘門

船頭平閘門は水位調節時に停船する閘室と、その両端にある水門扉を支える閘頭部で構成されている。全長は56.3メートル、閘室は長さ23.9メートル、幅5.6メートル。設計は青木長三郎、野村年らによるもので、当時のヨーロッパの最先端技法に、周囲の自然との調和を意識する日本人らしい景観美が加味された閘門である。

閘頭部の側壁はレンガを垂直に積み重ねた造りをしており、船や筏が接触する可能性がある部分や水門扉が当たる部分は花崗岩（御影石）を使用。閘室の側壁には勾配をつけ、城郭の石垣に見られる間知石積とした。

さらに水門扉は鉄製で、柱や桁部分には樫の木が使われた。また、水位を調節するための給排水溝や門扉開閉のギヤ部分などを閘頭部内に設置し、外観を損なわない工夫がなされた。すべての作業が手仕事だったというから驚く。

平成6年の改築工事にあたっても、明治期の景観をできるだけ残すように配慮された。1914年に完成したパナマ運河も全く同じ構造で、「日本のパナマを見てみたい」と突然パナマ大使が訪れたこともあった。

閘門の周辺一帯は公園として整



内開きと外開きの二重の門扉を持つ複開式閘門。内側の小さい扉が縦68m、横32m、重さ約9トンで、外側の大きい扉は縦76m、横32m、重さ約10トン。長良川側の閘頭部の上に機が架かっているが、構えなかった時代は門扉上部の板が張ってある狭い部分を通って対岸に渡っていたとい

閘門通航の様子



閘門入り口のバル（ロープを引く）で船が来たことを係員に知らせる



係員が給排水溝を開き、閘門内の水位と船側の水位が同じになったら、水門が開けられる



船が閘門内に入ると水門が開められ、もう一方の給排水溝を開き、閘門内の水位と船の進行側の水位を合わせる



水位が同じになったら水門が開けられ、船が出て行く。閘門内（閘室）の側壁を見ると、水位が下がったことがわかる

船頭平閘門管理所



船頭平閘門は国土交通省中部地方整備局管理による施設。敷地内にある管理事務所の2階には、木曾三川に関する情報の発信拠点「木曾川文庫」がある。木曾三川流域の歴史資料、研究論文などが収集保存されているほか、宝暦治水や明治改修などの貴重な資料が展示されており、一般に公開している。

愛知県西市立田町福原
問い合わせ:0567-24-6233

